

ベリンスキー 著作選集

I

森 宏一 訳

同 時 代 社

ベリンスキー著作選集 I

定価 3600円

1987年9月20日 初版一刷発行

著 者 ヴィ・ゲ・ベリンスキー

訳 者 森 宏 一

発行者 川 上 徹

発 行 所 (株) 同 時 代 社

東京都千代田区西神田2-7-6

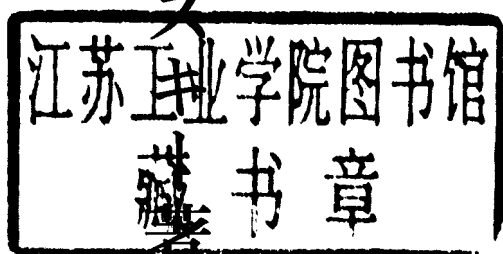
電話 03-261-3149

郵便振替 東京8-60777

印刷・製本 ケイ・エム・エス

ISBN4-88683-162-1

ベリンズ



著作選集

I



ヴィ・ゲ・ベリンスキー肖像（1881年）

まえがき

私は十九世紀なかばのロシアの先進的、革命的民主主義の三人の代表者、ベリンスキー、ゲルツェン、そしてチエルヌイシェーフスキーの見解を、かれら自身の言葉で紹介し、その概観をしめそうと望んだ。すでにそのうちの二人についてそれを果し、生年からいえば一番先頭のベリンスキーに到り、ここに私の希望をなしおえることができた。ベリンスキーが一番あとになったのは、私の翻訳の準備によるのである。

これらの思想家の著作選集が、ここに見るような形で出版されえたのは、このために協力、尽力をおしまなかった同時代社、同社の人々、とりわけ川上徹、藤井宏志の両氏の努力、また印刷会社のみなさんの精励のおかげであり、ここにこれらの人々に心からの感謝を申し上げますと同時に、私のこの仕事のために色々な点で援助され、励まされた方々にも厚くお礼を述べたい。

ベリンスキーは、文筆活動をはじめから終始一貫して文学批評にたずさわった。しかし、この活動にはこれを支える深い根底、すなわち哲学的思索があり、これにもとづいて文学批評がなされ、読者をして文学についてばかりでなく、かれらの世界観、社会観に新たな光を投げかけたのである。かれは文学批評家であり、かつ哲学者であり、すぐれた思想家であった。したがって、ロシア思想史にとつてはベリンスキーに触れず通つていくわけにはいかないのである。私はこの本に翻訳しかれの諸論文がそのことをしめすであろうと考える。

簡単ながら以下にかれの生涯について述べておきたい。

ヴァイサリオン・グリゴリエヴィチ・ベリンスキーは、一八一一年六月十一日（ロシア革命前の旧暦では五月三十日）、スヴェアボルクという町に、海軍軍医を父とする家庭に生まれた。この時代はナポレオンのロシア侵略を撃退した（一

八一二）祖国防衛戦争、ついで、一八二五年のデカブリストの反乱事件をへて、ツアーリ専制、農奴制反対の社会的胎動が高まりつつあった。ペリンスキーはその教育を、一八二二と二四年に郡学校でうけ、ついでペンザ市（モスクワ東南、約六〇〇キロにある）で中等教育（ギムナジウム）についた（一八二五と二八）。この学校には、有名な『ペテルブルグからモスクワへの旅行記』（一七九〇）の著者（専制の抑圧と搾取をばくろしている）ラジシチェフの息子の教え子であった教師もいた。この地にあった頃、ペリンスキーは大の演劇愛好者になり、演劇は全世界を写し出すと考えた。またかれは当時からロシアの有名な詩人たちの本を読み、とりわけプーシキンに深く感銘したが、この感銘はずつと後までもち続けられた。

十八歳のとき、かれはモスクワに出て、入学試験にパスしモスクワ大学の人文科の国の給費学生となった（一八二九と三二）。大学には当時の社会の動向を反映して専制、農奴制反対の運動があり、国による多くの処罰者がでていた。給費学生は大学の寄宿舎の一室をあたえられていたが、この部屋でペリンスキーは他の学生らと文学討究と集会をやった。大学当局はかれの思想傾向に疑いをいだいて、かれを「学業不振、身体脆弱」という理由を名目にして除籍した。

社会に投げだされたかれは、雑誌社の雑用、校正、書物解題、フランス語の翻訳などの仕事で生活し、やがて雑誌に文学批評を書くようになり、また大学の同窓のスタンケーヴィチのグループに加わり、ドイツ哲学、フィヒテ、シェーリング、とくにヘーゲルの哲学を学びとり、そこから「現実性は、その展開の過程で、必然性であることをしめす」とか「現実的なものはすべて合理的であり、合理的なものはすべて現実的である」といった命題を、現実肯定的と解して、変革ではなく人々の開明がだいじだという態度をとり、現実と妥協的であった。これが、当時のゲルツェンらの社会的政治的変革思想に立つグループとの対立をもたらしした。

一八三九年、ペリンスキーはペテルブルグに移り、それと共にかれの思弁的、観念論的思想の、唯物論への転換がはじまり、革命的民主主義の立場を明確にするようになる。ゲルツェンらのグループとの和解ができた。そしてスラブ主義との闘争が鋭く展開され、文学批評にも反映された。

しかし残念なことに、かれを長く苦しめていた肺患のために、一八四八年六月七日（旧暦で五月二十六日）にかかれは

その短い生涯をとじた。三十七歳。

一九八七年秋

訳者

目次——ベリンスキー著作選集I

まえがき……………5

文学的空想……………11

ロシアの中篇小説とゴーゴリ氏の中篇小説……………137

『アラベスキ』と『ミルゴロード』

芸術の理念……………205

一八四三年のロシア文学……………229

ゴーゴリへの手紙……………299

〔選集Ⅱ 目次〕

アレクサンドル・プーシキンの作品

第五論文

第八論文——「エフゲニー・オネー

ギン」

第九論文——続「エフゲニー・オネー

ーギン」

一八四六年のロシア文学の概観

一八四七年のロシア文学の概観

凡 例

一、訳本は『ペリンスキー著作集』全九巻、一九七六
～八二年、モスクワを用い、訳出論文の掲載ページ
をこの著作集から採った。

二、各論文の初めに、論文内容の注釈を載せ、主とし
て編集者のものに拠った。

三、本文中、また段落あとの注で、編者や訳者がつけ
たのは「」の印しをつけ、本文中の原著者の注は
（ ）とし、段落あとのものにはなにも符号をつけ
ない。

四、原文で斜体活字のものは訳文では傍点でしめし
た。

五、本訳書は二巻で刊行し、第二巻末に人名索引と十
九世紀なかば前後のロシアのおもな定期刊行物一覧
とをつける。

文学的空想

（選集第一卷、四七～一二七ページ）

この論文は一八三四年『モルヴァ』誌「話題」誌に、九月から十二月に九回にわたって掲載された。

この発表以前にも、ベリンスキーは文筆の活動をしていたが、この論文によって名声をえ、ロシアの読者はこれを通じて、すぐれ著作家、自国文学がいまだ知らなかったような、明瞭かつ強力な才能の評論家をみいだした。

かれの論文でベリンスキーは、ロシア文学の百年にわたる発展の概観をあたえ、その価値にきびしい再評価をもたらし、かつ焦眉の芸術上の問題に哲学的美学思想をかたく結びつけた（「ヘーゲル哲学の強い影響がある」）。

とくに強い印象を若い、かれと同年輩者たちによびおこした。かれより若年のグリゴリエフ〔詩人、論評家、一八二二～六四〕は、「この時からかれは、当時若い世代であつたわれわれの眼には、意識的あるいは批判的運動の頭目になった」と言っている。しかし多くの既成の評論家たちからの論難もはげしくあらわれた。ベリンスキーは、これらの論難には反論をもつて答えた。それらに

は、シェヴィレフ〔文学評論家、文学史家、一八一〇～九三〕や詳しい評論を書いたネヴローフ〔教育家、著作家、一八一〇～六四〕がおり、かれらにベリンスキーの反駁が加えられている。スタンケーヴィッチ〔哲学者、詩人、かれのグループにベリンスキーは属していた〕は、シェヴィレフの批評に関連しながら、ベリンスキーの論文がすぐれているとしながらも、そこには思想はあるが、感情がないと、人に伝えていた。後に、チエルヌイシェーフスキーも、かれの『ロシア文学のゴゴリ時代の概観』（一八五六）で、この論文にふれて述べている（「かれの全集、第三卷一八三ページ。ベリンスキーの論文とかれの思想の発展については、拙訳『ゲルツェン著作選集』Ⅰの「モスクワの若い世代」、その他が役に立つであらう。」）

（散文における挽歌）

（Ⅰ）

私はこういうことを、どんなウソよりも
ずっと悪いと、本当に幾度も君に言ってい

るのだ。おい、君、こんな人間たちをどうして、ずっと礼儀があるなどと言うのかね、と私は言うのだ。

グリゴージェフ、喜劇『知恵の悲しみ』

あなたはよい本をおもちですか？——いや、けれども私たちのところにはりっぱな作家たちがいますよ。——そうですか、少くともあなたのところには文学がありますか？——そうではありません、私たちのところには本屋商売があるだけです。

『男爵ブランベウス』〔オ・センコーフスキー『男爵ブランベウスの空想旅行記』から〕

あなたは記憶していますか、——わが国の文学のうちで心が活気づき生活のなにかの息ぶきがあった時、才能ある人がつぎつぎと、詩がつぎつぎと、小説がつぎつぎと、雑誌がつぎつぎと、作品集がつぎつぎと現われたときを、それでわれわれが現在を大いに誇り、大いに将来に期待し、そしてわが国の現実に、それよりさらに一層楽しい期待に

自信のみちた人たちが、われわれは自国のバイロン、シェイクスピア、シラー、ウォルター・スコットをもっている、かたく確信していたという、素晴らしい時を。ああ！ o bon vieux temps (よき時期)、お前はどこに、よろこばしい夢、あなたはどこに、人を誘いこむ者、期待、お前はどこにいるのか！ なんと、すべてがこんなにも短いあいだに変わってしまったか！ これほどに力つよい、これほどに快い望みのあとで、なんとという恐ろしい、魂を引きさく幻滅であるう！ わが国の文学上の力士たちの竹馬は折れ、葉づくりの舞台はその場でくずれた。つまらぬ月並みということが、高みによじのぼるということは、ときにはあるものである。それと同時に、われわれをかつてあれほどに心を唆かした僅かばかりであまり大きくない天分の者たちは黙ってしまい、眠りこんでしまい、消えていつてしまった。われわれは眠りにおち、そして自分がクレズ〔ロシアの王の名〕だと思い、やがてイル〔貧乏人、ホメロスの『オデッセイ』にでてくる人物〕になって目を覚ましたのである！ ああ！ わが国の天才たちや半天才たちのそれぞれの人に、詩人のこの感銘深い言葉が、なんとよく当てはまることだろう！

曇ったどんよりした日には、

花は咲かず、しぼんでしまふ。

〔ア・ボレシャーエフの小詩から〕

本当に、——以前に、——そして現在も、あのときに——
そして今も！ おお神さま！ とくにロシアの詩人、プー
シキン（一七九九—一八三九）、その優れた偉力のある詩では
じめてロシアの生活の息吹きが香り、その調子のいい多面
的な才能を大いにルーシ「ロシアの古名」が好みい、つくし
み、その調和のとれた響きにもルーシは大いに強い興味で
耳をかたむけ、そして初めから大きな褒賞をもって応答し
た、そのプーシキン、プーシキンは『ボルタヴァ』や『ゴ
ドウノフ』の作者であり、またプーシキンは『アンドジェ
ーロ』の作者、その他の死んで生きてはない物語の作者！
……コズローフ（一七七九—一八四〇、盲目の詩人）は、優し
い女性の読者がたくさん涙を流した、チエルネツツの苦
しみ〔コズローフの作『チエルネツツ』のこと〕の物思いに沈
んだ物語詩の詩人で、調子よくわれわれに伝わったこの盲
人はたびたび豊かな視力というものをもち、そしてコズロ
ーフは『読書文庫』に印刷された、長い、また短かい、物
語詩やその他の小詩の作者であつて、こういうものについ
てはただ、それらにあつては万事都合よく行つていゝと言
うことだけができる、——すでに『モルヴァ』誌で指摘さ

れたように。……どうでもいいことである！……われわ
れは、ここで多くのもの、非常に多くのものを、こういう
情ない比較、こういう痛ましい対照を、ならべることがで
きる、しかし……ひとことと言えば、ラマルテイン（一七九
〇—一八六九、フランスの詩人、政治活動家）が言っているよう
なことである、——

Les dieux étaient tombés, les trônes étaient
vides! (神々は落ちた、玉座は空っぽになった)

*〔コズローフは『読書文庫』にその他多くの作品を出し
た。『万事は都合よく……』という言葉は、ナデージュ
ンが『モルヴァ』誌一八三四年二三号で『新しい住居』
の第二部で書いた評論からとつたもの——編者。ナデー
ジュンは詩人、ジャーナリスト（一八〇四—五六）で、
チャダーエフの『哲学書翰』（一八三六）をかれ編集の
雑誌に載せたため、当局の忌諱にふれ、流刑になった。〕

どういふ新しい神々が、古い神々の空いた席を占めたの
であらうか、ああ、それらの神が古い神々と取り代つた
が、代りにはならなかったのだ！ 以前には、その当時す
べての人たちを誘ひこんだ若々しい期待に心をうばわれ
た、わが国のアリストアルコスたち（アリストアルコスは、アレク
サンドリア学派——紀元前三世紀—後五世紀にアレクサンドリア
に栄えた——の文献学者）は、声を張りあげて言つた、——